

2025年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏名
教育学部	准教授	伊藤 数馬
最終学歴	学位	専門分野
広島大学大学院教育学研究科博士課程前期修了	教育学修士	体育科教育学、サッカー

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

学生目線に立ち、学生が主体的に学べ、且つわかりやすい教育活動の実践

【目標】

講義等や委員会活動を通して、学生に「真に信頼して事を任せうる人格」が形成できるよう教育活動を実践する。また自分の credo「学生のために、自分ができることから最大限」を常に意識し、学生ファーストの姿勢で教育活動に取り組む。

学生が主体的な学びを実践できるよう、各教育分野で努める。特に教育方法の創意工夫、事前事後学習が必要とされる授業内容の仕組みを検討導入する。教育保育現場で生きる指導実践力を養う授業内容を展開する。

【方針】

学習内容に対する興味・関心を高め、双方向性の教育を実施する。

【計画（方法）】

幼児・児童が体を動かすことを好きになる運動指導の実践を研究し、そのための理論と実践を学生に学習、理解させる。学生の主体的な取り組みを引き出すため、グループ活動等を多く取り入れたアクティブ・ラーニングや ICT 教材を導入する。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

幼児と健康、体育科教育法、スポーツ実技（球技）、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）

保育内容（健康）、体育2クラス、専門スポーツ実習（球技）

総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

授業内容の理解を深めるための取り組みとして、動画等の視聴覚教材を活用するとともに、ディスカッションやグループワークを多く取り入れた双方向型授業を実践した。また、毎回の振り返りミニレポートを通して学生の理解状況を把握し、適宜フィードバックを行うことで学習内容の定着を図った。

視聴覚教材の活用は授業内容の理解を促進する上で一定の効果が認められたが、振り返りミニレポートの内容を確認すると、一部の学生において理解が十分でない様子も見受けられた。そのため、今後は教材提示の前に学習の観点や着目すべきポイントを整理して提示するなど、理解を促すための指導方法やフィードバックの工夫をさらに検討する必要がある。

また、ディスカッションおよびグループワークにおいては、積極的に参加する学生とそうでない学生の二極化が見られた。今後は、グループ編成の工夫や役割分担の明確化等を通じて、すべての学生が主体的に参加できる学習環境の整備を図る。さらに、オフィスアワーを設け、学生からの質問や相談に随時対応する体制を整えている。

○作成した教科書・教材

すべての科目において、対面・オンライン時に限らず、最新時事情報を盛り込んだ補助資料を作成し活用した。

・白井克尚、今津孝次郎、伊藤龍仁、堀篤実、伊藤数馬、梶浦恭子、新實広記、橋村晴美

『『サービス・ラーニング』ハンドブック』第5版、愛知東邦大学教育学部、2019年3月

○自己評価

学生が授業内容を理解しやすいよう、授業では具体的事例を多く取り上げるとともに、質疑応答の機会を適宜設けることを心掛けた。また、グループワークを取り入れた学習活動や、学生の発言・レポート等に対するフィードバックについては、授業アンケートや授業内の反応からも概ね好意的な評価が得られた。

さらに、授業規律の形成にあたっては、一方的な指導とならないよう配慮し、学生とのコミュニケーションを重視しながら授業運営を行った。学生の主体的な参加を促すことを意識し、授業全体の雰囲気づくりにも留意した。

また、実技科目を多く担当していることから、技能面に不安や苦手意識を持つ学生に対しても積極的に声かけを行い、安心して授業に参加できる環境づくりに努めた。今後も、各学生が自身の考えや工夫を発揮できるような学習の仕組みを継続的に検討し、授業改善に取り組んでいく。

II 研究活動

○研究課題

- ・幼児・児童を対象とした「運動遊び」「体育科授業」に関する研究
- ・サッカーにおける実践研究（チームビルディングに着目して）
- ・バルシューレ（ボールゲーム指導プログラム）に関する研究

サッカーにおける試合時のフォーメーション（配置）やボールゲームにおけるオフザボール（ボールを保持していない状況）の動きに着目し、その指導方法を検討し、教育活動に生かしていく。バルシューレ（ボールゲーム指導プログラム）やチームビルディングについても研究していきたいと検討している。

○目標・計画

【目標】

研究課題をまとめたものを研究成果物として学内外に発表できるよう努める。

【計画】

- ・幼児児童を対象とした「運動遊び」「体育授業」に関する実践報告や先行研究を収集、考察する
- ・他研究課題についても、学会等で発表していく

○2018年4月から2026年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・白井克尚、今津孝次郎、山本かほる、丹下悠史、水野正朗、柿原聖治、西崎有多子、伊藤数馬「教員養成におけるアクティブ・ラーニングの実践研究」唯学書房、2024年3月
- ・今津孝次郎、西崎有多子、白井克尚、中島弘道、新實広記、伊藤龍仁、柿原聖治、伊藤数馬「教員と保育士の養成における『サービス・ラーニング』の実践研究」唯学書房、2019年2月

（学術論文）

- ・大塚道太、森木吾郎、房野真也、伊藤数馬、山中亮、梶山俊仁、土田洋、高橋幸平、山本英弘「球技の工夫したゲームの実態調査その1 サッカーで実施されている指導目的と工夫の仕方について」日本体育・スポーツ・健康学会予稿集第71巻2021、2021年9月
- ・大塚道太、森木吾郎、房野真也、伊藤数馬「サッカーグラウンドの広さの違いが運動強度と内容に与える影響—正規グラウンドと面積1/2グラウンドの比較検討—」運動とスポーツの科学 第24巻 第2号 2019、2019年3月

（学会発表）

- ・大塚道太、森木吾郎、房野真也、伊藤数馬、山中亮、土田洋、梶山俊仁、山本英弘、高橋幸平「球技の『工夫したゲーム』の実態調査 その1 サッカーで実施されている指導目的と工夫の仕方について」日本体育・スポーツ・健康学会第71回大会:会場 オンライン、筑波大学、2021年9月
- ・大塚道太、小柳竜太、森木吾郎、房野真也、伊藤数馬、山中亮、土田洋、梶山俊仁、山本英弘「ボール運動のミニ・ゲーム化が運動強度に与える影響について—競技人数の違いに着目して」日本体育学会第70回大会:会場 慶応義塾大学、2019年9月
- ・大塚道太、森木吾郎、房野真也、伊藤数馬、梶山俊仁、山本英弘「ゴール型球技におけるコートの広さの違いが運動内容に与える影響—サッカーゲーム中のパス頻度に着目して」日本体育学会 第69回大会 徳島大学、2018年8月
- ・大塚道太、森木吾郎、房野真也、伊藤数馬「サッカーグラウンドの広さの違いが運動強度と内容に与える影響—正規グラウンドと面積1/2グラウンドの比較検討—」日本運動・スポーツ科学学会 第25回大会 広島大学、2018年6月

（特許）

特になし

（その他）

特になし

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

特になし

○所属学会

日本体育・スポーツ・健康学会、日本運動・スポーツ科学学会

○自己評価

2025年度については、十分な研究成果を学内外に発表することができなかったが、次年度は研究成果を発表する機会を増やしていきたいと考える。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

大学・学部における校務および委員会の活動を積極的かつ円滑に行う。

【計画】

【全学】・総務委員会（委員長）・教職支援センター運営委員会・教育学部部会

【学部】・学部執行部 ・初等教育コース リーダー ・ガイダンス ・教職セミナー

○学内委員等

【全学】・総務委員会（委員長）・教職支援センター運営委員会・教育学部部会

・第4期中期計画PT

【学部】・学部執行部・初等教育コース リーダー・ガイダンス・教職セミナー

・オープンキャンパス模擬授業担当

○自己評価

総務委員会委員長として、入学式および卒業証書授与式等の大学公式行事に関する事項をはじめ、防災に関する事項、同窓会組織との連携に関する事項、施設設備に関する事項について、委員会において検討を行い、必要な対応にあたった。大学運営に関わる基盤的事項について、関係部署と連携しながら円滑な実施・運営に努めた。

また、教職支援センター運営委員会委員として、教職課程に関する諸事項について審議に参加するとともに、教育実習の運営や教員採用試験対策等に関する取り組みについて検討を行い、学生の教職志望の実現に向けた支援体制の充実に寄与した。

さらに、学部における分掌としては学部執行部の一員として学部運営に携わり、入学生および在学生ガイダンスの企画・運営を主に担当するなど、円滑な学部運営に努めた。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

【目標】

地域に根ざした大学・学部であるよう社会貢献活動に積極的に参加する。

【計画】

教育学部の教育活動（サービス・ラーニング等）を通じた地域貢献事業やボール遊び・サッカーを媒体とした地域貢献活動を企画・実践する。

○学会活動等

・愛知東邦大学地域創造研究所所員

・東海大学女子サッカー連盟常任理事

○地域連携・社会貢献等

2023年度高大連携授業 講師「運動好きな子どもを育てるためには」（2024年2月）

第33回愛知サマーセミナー 講師「幼児期における運動の大切さとは」（2023年7月）

TOHO SUMMER SCHOOL 「ボール遊び」講師（2022年8月）

○自己評価

2025年度については、特に活動することができなかった。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

女子サッカー部部長として、部の円滑な運営や部員の競技力向上に加え、魅力あふれる人格の形成、地域・地元企業との連携事業等に貢献していく。また大学女子サッカー地域対抗戦2026に東海選抜監督として参加、4位入賞という結果であった。さらに一般社団法人TOHOLFC理事として本学女子サッカー部の活動を支援することにも尽力した。

VI 総括

2025年度については、教育・研究および学内運営業務の各面において、概ね計画に沿った取り組みを実施することができたと考えている。

研究活動においては、継続している共同研究を推進するとともに、幼児・児童を対象としたボール遊びプログラム「バルシューレ」に関する研究や女子サッカーに関する研究について、今後は研究成果を学内外に発表する機会をさらに増やしていくことが課題である。また、幼児・児童を対象としたボール遊び教室等の実践的な取り組みを拡充し、研究成果を教育・地域活動へと還元していきたい。

教育面においては、今後も学生ファーストの視点を重視し、授業満足度の向上および学習内容の理解深化につながる授業実践に継続して取り組んでいく。

さらに、学内委員会業務についても引き続き積極的に関わり、大学運営への貢献に努めていくとともに、女子サッカー部の指導においては、目標としている全国大会への出場および上位入賞を目指す。また、地域と連携した女子サッカー普及活動にも取り組み、地域貢献の推進にも尽力していきたい。

以 上